

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成27年度大学入試センター試験の公民科「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）の受験者数（追・再試験を含む。）は、48,701人で、昨年度比116人（0.2%）の減少となった。

「倫政」の本試験は昨年度と同様、大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3題ずつ出題された。設問は「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問で、50点ずつの配点も変わっていない。

「倫理」分野は、リード文が「倫理」追・再試験の第1、3、4問からの転用である。設問は「倫理」の源流分野の第2問から2問ずつ、「倫政」の第2問（日本思想）に東洋源流、第3問（西洋思想）に西洋源流を配している。「倫政」の独自問題は無く、設問は全て「倫理」からである。

「政治・経済」分野は、第4問のリード文がオリジナルなものであるが、設問については、第4問が「政治・経済」本試験の第1、5問からの抽出と2問のオリジナルなもの、第5、6問は「政治・経済」の本試験の第3、4問からの転用である。

細部にわたる評価に当たっては、次の点に留意して行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標・内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力・判断力・応用力を問う総合的問題まで、バランス良く配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野では、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すように工夫されているか。
- (5) 各分野の問題配分は適切か。問題の出題方法、配点、難易度は適切か。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 「時間を超越した正義・規範」について（現代の諸課題と倫理、青年期の課題）

時を超越して通用する正義とは何か、人類は時代を経てどのような進歩を遂げてきたのか、といった問いに、相対主義の概念を組み合わせ論じた上で、分野を横断した総合的な出題と言え、意義深い良問である。配点もやや多く、全体的に難問であるがよく練られた出題である。

問1 標準的な難易度の設問。

問2 平易な設問。

問3 標準的な難易度の設問。

問4 「幸せ」と「不安や悩み」についての調査をグラフから読み取る問題である。設問の意図は妥当であり、正解にたどり着くキーワードも示されているが、受験者にとってはそれを見抜くことは簡単ではない。難しい設問。

問5 引用資料『ベスト』からの出題。標準的な難易度の設問。

第2問 「日本の思想に見る学びの意義」について（日本思想・源流思想）

受験勉強に追われる受験者に対して学ぶ意義を問うメッセージ性を持ったリード文であり、新しい切り口から問い掛ける意欲を感じる設問も多かった。その一方で、選択肢の誤りの部分が見落としがちな細部であったり、やや作為的に感じられたりするものもあった。

問1 古代日本人の心性を古代と近世という二つの視点から見た、平易な設問。

問2 最澄のより深い理解が求められた標準的な難易度の設問。

問3 ブッダの説いた四諦^{したい}についての理解を問う平易な設問。

問4 林羅山、安藤昌益、二宮尊徳について、「上下定分の理」、「自然世」、「天道と人道」というキーワードが示されており、きちんと学習した受験者にとっては平易な設問。

問5 『論語』についての知識を問う、平易な設問。

問6 西田幾多郎の「純粹経験」、柳宗悦の「民芸運動」、丸山真男や小林秀雄など、内容を掘り下げた理解を問い、学習の広さと深さを要求しているためやや難しい設問。

問7 真摯な学びによって困難を乗り越えるというリード文の趣旨に合致する記述を選択する設問。本文の内容と矛盾する部分が明らかであり、標準的な難易度の出題であった。

第3問 「理性に対する評価の変遷と科学技術」について（西洋近代思想・源流思想）

近代の西洋における理性に対する評価の変遷を、科学技術の発展と関連付けながらたどった、よく練られたリード文である。また、西洋の源流思想から近代まで万遍なく出題されている標準的難易度の大問であるが、現代思想が出題されなかった。

問1 ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の聖典についての理解が問われたやや難しい設問。「罪を贖^{あがな}う者は救われる」、「聖職者と一般信徒がそれぞれに実践すべき規律」という各選択肢の誤りに受験者は気づきにくかったのではないか。

問2 ベーコンの主著及び学問の探究方法に関する基本的知識を問う平易な設問。

問3 社会主義についての基本的用語を問う平易な設問。

問4 コントの思想を問うもので、「創造的知性」、「実存は本質に先立ち」、「絶対精神」という基本的用語が誤文には入っているので、平易な設問。

問5 bに入るのは感性か悟性か、カントの認識論についての正確な理解が無いと難しいが、aにカントの主著を入れるのは容易なので、標準的な難易度の設問。

問6 プラトンのパイドロスを読ませ、趣旨の正誤を判断させる設問。言葉をテーマとしたリード文にふさわしい内容で、丁寧に読解する必要がある。難易度は標準的である。

問7 リード文趣旨の読解力を問う設問である。誤りも明らかであり、標準的な難易度の設問。

第4問 政治参加をテーマにした、政治分野、経済分野の融合問題である。リード文では多様な政治参加の在り方が紹介されるなど、読み応えのある文章となっており、また設問においては資料問題を含む、総合的な力が問われる出題であった。難易度は標準である。

問1 寡占市場が持つ特徴に関する標準的な問題である。

問2 「国家の3要素」に関する平易な問題である。

問3 各国の総選挙に関する標準的な問題である。①と④は知識を基にした資料読み取り問題であるが、③と④はグラフの読み取りのみで判断できる。

問4 日本の予算に関するやや難しい問題である。

問5 各国における社会保障の財源構成に関する難しい問題である。知識を基に、二つの資料を読み取る問題となっており、総合的な学力を問う問題として評価できるが、解答を導き出すための、知識がやや細かすぎる。

問6 国内外の制度における合意形成や決定の過程に関するやや難しい問題である。

第5問 学生AとBの二人による会話文形式のリード文からなる政治分野の問題である。主に基

本的人権をテーマとして、受験者にとって親しみやすい文章である。設問は政治分野の基本的な知識を問う問題で構成されている。難易度は標準である。

問1 平等権に関する空所完成問題であり標準的な問題である。近年の最高裁で出された違憲判決という時事的な観点も含め、リード文をしっかり注目させるこの形式の出題は好ましい。

問2 権利の拡大及び救済のための制度に関する難しい問題である。出来事の順序を問うことより、内容を問う問題の方が望ましい。

問3 表現の自由に関する標準的な問題である。

問4 本的人権に関する平易な問題である。

問5 統治機構に対する監督や抑制に関する標準的な問題である。

問6 アファーマティブ・アクションに関する標準的な問題である。法の下での平等の本質を問う問題であり、解答を導くのは容易だが思考力を必要とする良問である。

問7 公務員の制度と組織に関する標準的な問題である。

第6問 オリンピックと経済に関するリード文を用いた国際経済・国際政治の融合問題である。リード文は児童労働問題が触れられているなどメッセージ性のある文章であり、設問では時事的な問題や資料問題を含むバランスが取れた出題となっている。難易度は標準である。

問1 2008年に起こった経済的な出来事に関するやや難しい問題である。時事的な要素を含んだ出題と判断するが、2008年という受験者の多くは小学生か中学生であろう。このことを踏まえると、時事問題の出題にはより工夫を求めたい。

問2 経済収支に関するやや難しい問題である。

問3 B R I C Sに関する平易な問題である。

問4 各国における実質成長率の推移に関するやや難しい問題である。知識の活用を必要とする資料読み取り問題であり、良問である。

問5 冷戦における出来事に関する標準的な問題である。

問6 企業活動のグローバル化に関するやや平易な問題である。

問7 需要と供給の関係に関するやや平易な問題である。需要供給曲線のシフトに関する基本的な問題であるが、児童労働を問題文の題材として扱うなどメッセージ性の高い問題である。

3 試験問題の分量・程度について

「倫理」の分野については、以下の通り。出題の類型については、主に総合的な思考力・判断力を問う問題は昨年同様5問、15点配当、主に基礎・基本的な概念などについての理解を問うものが10問、26点配当から7問、18点配当に減少、主に基礎・基本的用語や人名を問うものが昨年度4問から7問、9点配当から17点配当に増加した。しかし、後者については単純に語句を問うのではなく、文章で問う問題が増加している。

分野ごとの配点は「現代の諸課題」14点、源流思想11点、日本思想13点、西洋思想12点である。問題の程度については、第1問～第3問ともに標準的な難易度であったと考えられる。

「政治・経済」分野については、以下、2点に分けて述べる。

- (1) 問題の分量・程度は四つの観点から分類した結果、おおむね適切であったと考えられる。教科書に基づく知識を問う問題は13問30点であり設問数、配点共に昨年度と同じであった。教科書に基づく知識を使って思考力や応用力を問う問題（第5問の間6、第6問の間7）は、昨年度の3問9点から2問6点に減少した。時事的・社会的な知識から国内的・国際的な諸課題を考えさせる問題（第5問の間1、第6問の間1）は昨年度の1問3点から2問5点に増加となった。資料やグラフ・図表などを使って理解力・分析力を問う問題（第4問の間3・問5、第6問の間

- 4) は昨年度の2問6点から3問9点と増加した。また、基礎と応用というレベルでの分類では、基礎が17問42点、応用が3問8点となり、昨年度と比較して応用の割合が増加した。
- (2) 各分野の問題配分及び配点については、政治分野が11問27点、経済分野が9問23点となり、本試験「政治・経済」と同様に政治分野に重点が置かれている。

4 試験問題の表現・形式

今年度の設問数は、大問数6、設問数39で変更はなかった。大問の構成は、「倫理」分野と「政治・経済」分野それぞれの設問数及び解答数、配点の割合も昨年度と同様であった。

「倫理」分野では、基本的な用語など知識、概念に関する理解を問うものと総合的な思考力・応用力を問うものが、バランス良く出題されていた。また、出題形式については、三つの文章全ての正誤判定を求める出題が増加しており、やや難化している。なお、各設問の表現については、受験者が十分に理解できる適切なものであったと考えられる。

「政治・経済」分野では、政治や経済の諸課題について受験者に思考と理解を促す出題者のメッセージと意図が随所に感じられる。今年度も昨年度と同様に、「政治・経済」本試験と「倫政」オリジナル問題で構成された形式であったが、特に「政治・経済」本試験からの抽出された設問とリード文との関連性を高める工夫は、今後とも問題の作成において考慮していただきたい。

5 要 約

「倫理」分野については、学習指導要領に定められた内容から幅広く出題され、総合的な力を問う良問や、意欲作も多く倫理の問題として評価できるものである。高校での学習の現状や生徒の動向、更に教科書での扱いなどを踏まえて、基本的事項から発展・応用的な問題まで幅広く、学習の結果がより良く評価される出題を続けていただくようお願いしたい。

「政治・経済」分野については、学習指導要領で求められている内容に沿って、広い範囲から出題されている。全体として、教科書での学習を基本とした出題となっている。

学習指導要領に基づく基礎的・基本的知識や概念の理解を問うことに重点を置きつつ、時事的な問題や資料を用いて多面的・多角的に考察させる良質な問題の作成を、今後とも期待したい。